

3 歳未満児保育と「もの・空間」の発達の意義

—保育所及び乳児院における 1, 2 歳児の保育室環境に焦点をあてて—

齋藤政子

3 歳未満児が、特定の保護者の養育の場である「家庭」から離れて、同年代の乳幼児と関わり合いながら人生で初めて集団生活を経験する場として、我が国では、「保育所」と「乳児院」が存在する。

「保育所」における乳児集団保育は、戦後、質量とともに発展し、保育の専門職である保育士の「適切で個別的な働きかけ」、および子ども同士の「集団的共感」が存在する場として社会的にも認知されつつある。乳児院でも、個と集団の視点から保育が組立てられており、個々の子どもの状況に応じた福祉の支援が戦後早くから進められ、「養育担当制」を取り入れている乳児院も多い。近年は「小規模グループケア」を取り組み始めているところもあり、一人ひとりの子どもに対して、密度の高い保育・養育を行うことが重要であることや、環境によって「生活」行動が変化することなどが、全国乳児福祉協議会などで報告されている。保育所保育と乳児院保育は、同じ 3 歳未満児を対象とした、保育施設における集団保育という形態をとっているが、家庭を生活基盤としている子どもが日中保育所に通う形態をとっている保育所保育は、いうなれば「家庭—施設連携型保育」であり、乳児保育の専門家が 24 時間の体制を組み、保育をおこなっている乳児院保育は、「乳児専門型養護施設保育」ということができる。

しかしながら、乳児院保育においては、保育室内外の環境全体を視野に入れ、子どもの立場に立っておもちゃや場を用意することも子どもたちへの「個別的配慮」につながるのだということや、保育の場に存在する保育者や仲間という「ひと」やおもちゃなどの「もの」が、子どもにどのような影響を与えるかを考えることが重要であることについては、近年ようやく認識されてきたといっていだろう。乳児院も、3 歳未満児の暮らしの場であると同時に、養護（ケア）と教育の一体的提供の場としての機能を求められていることは事実である。様々な困難を抱えて入所してくる子どもに対して養護に重心を置きながらも、子どもの発達段階に応じて適切な教育的働きかけが必要であると考え。

さらに、近年、保育所では、延長保育実施園や非正規雇用の保育者の増加とともに、多種多様な運営母体を持つ保育所が増えている。また、子ども子育て支援新制度が平成 27 年 4 月からスタートし、満 3 歳未満の 3 号認定の子どもは、保育所以外の認定こども園・小規模保育等でも保育を受けることになる。3 歳未満児対象の保育施設は、立地や構造、面積基準、設備・備品の充備など検討すべき事項が多く、物的空間的環境をどのように整備することが、3 歳未満児保育の質の向上につながるのかを検討することは、保育現場にとってまさに喫緊の課題である。

そこで本論では、3 歳未満児保育を、「保育所および乳児院双方を視野に入れ、3 歳未満児クラスの乳幼児に対して、その発達の状況や持っている個性に応じて意図的計画的に行われる養護（ケア）と教育の一体化した働きかけ」とし、特にその中でも、1, 2 歳児の保育環境について研究対象としていくこととした。その際、1, 2 歳児の発達という側面から物的空間的環境の意味とあり方を考察するために、「もの・空間」を切り口として、1, 2 歳児保育における「もの・空間」の発達の意義とそのあり方について検討した。本研究の目的は、次の二点である。第一に、日本の 3 歳未満児保育をどうとらえるべきかという問題、第二に、3 歳未満児保育における「もの・空間」がどのような発達の意義を持つのかという問題、この両者を明らかにすることである。その際、3 歳未満児保育を捉える視点

として、「個の視点」と「集団の視点」の両方から1, 2歳児の「もの・空間」について考察した。これまで述べたように、3歳未満児保育は、主流としては家庭での個別保育ではなく、子どもと保育者の多対多の保育として日本では発展してきている。そうした日本の3歳未満児保育の特性を最大限活かす保育環境のあり方を考察することが、これからの保育の質的向上には欠かせない。また、保育環境は、保育者の意図が潜むもの（倉橋, 1936/2008a）であるため、保育者の意識の面から3歳未満児保育における「もの・空間」を明らかにすることとした。なお、本研究では、「もの・空間」は、「ひと」に対して意味を提示するだけでなく、「ひと」の意図・思考を内在し、「ひと」の心のありようによってその存在のありようも変わっていくものとして捉え、何らかの保育上の役割を持つものとして捉えていくこととした。また、「事物」「玩具」「遊具」「素材」「用具」「動植物」「設備」、など、実体として子どもの前に存在し、子どもに影響を与える「物」を、ひらがなの「もの」と表記して総称し、また、「場」、「場所」、「施設」「コーナー」などを総称して「空間」とした。

（1）3歳未満児保育の歴史的考察と先行研究（序章、第1章、第2章）

近世・近代における「保育」の歴史的考察の中で、幼い子どもが「教育」を受けるということは、「人として認められ尊ばれるということ」と同じ地平に立脚した問題だったということを確認した。「教育」に関する先人たちの研究を踏まえると、「教育」とは、人類の文化遺産としての知識や技術を伝達し、能力を引き出すことだけではなく、「養う」という意味を含んでおり（ドベス, M., 1977 など）、幼い子どもが「一個の独立した人格をもつ人間」として認められていく歴史の上に成り立っている機能である。現代における「保育」は、この「教育」という機能に、さらに乳幼児期の発達的特質を踏まえ、「養護」という側面を統合させたものであると考えられる。

また、第2章では3歳未満児保育と「もの・空間」に関する内外の先行研究をレビューした。

（2）本研究から得られた知見（第3章から第5章）

2-1. 1歳児の「生活活動」における「もの・空間」の役割

1歳児は一歳半を過ぎると、他者と目標を共有しながら、生活活動の時間的空間的拡大の中で、**見通し能力**を育てていくことが明らかとなった（本論では見通し能力は、「主体が、現時点から未来にむけて、状況を予測し、ある目的のために、必要な行為やものをイメージし、行為を組み立て、計画し、遂行する能力」というように定義する）。またその能力を育てていくうえで「もの」「空間」が大きな役割を果たしていることが明らかとなった。「生活活動」はそもそも、ひとつひとつの「行為」が連結されて実行されている。しかし、低年齢児、特に1歳半の節を越える前の乳児では、例えば着脱活動中の「パンツをはく」という行為は足を入れることすら難しく達成しにくいこともある。子ども自身が主体的に行動し**見通し能力**を高めていくためには、保育者の言葉かけだけでなく、着脱マットや着脱コーナーなど「もの」や「空間」の**機能性**も重要であることがわかった（図1）。

2-2. 新入園児の慣れ過程における「もの・空間」の役割

入園したばかりの1歳児は、「もの」や「空間」から意味や情報、価値などを受け取り、それをある「空間・場」で他者と共有する。事例によれば、子どもは、「もの・空間」から、前の日に来園した時と同じおもちゃが置いてあって遊べるという**「安定感」**や、ここにいても大丈夫という**「安心感」**を感じたり、何かをイメージして行動していた。つまり、子どもは、慣れ過程という特殊な環境下でも、「もの」や「空間」と積極的に対話し、環境から**「意味」**を見出して利用していくのではないかとということが示唆された。「ひと」との間だけではなく、子どもは「もの・空間」との間でも相互交

渉を行っているのではないかと考えられた(図2)。

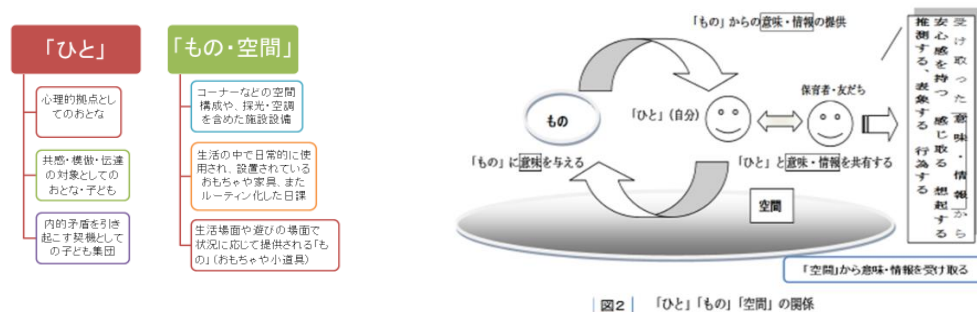


図1 3歳未満児の見通しを支える保育室環境

図2 「ひと」「もの」「空間」の関係

2-3. 乳児院における縦割り保育の導入と「ひと」「もの」「空間」

本研究では、1, 2歳児の環境変化においては、「ひと」「もの」「空間」という3種類の心理的拠点の存在が重要であることが明らかとなった。養育室が変更されると、せっかくその子どもが築いた「ひと」との信頼関係も、お気に入りの「もの」や「空間」といった心理的拠点も失ってしまう。乳児院で暮らしている3歳未満児にとって「落ち着き」や「くつろぎ」という「安心感」が「もの」「空間」に存在することが、いかに重要かが、このアクションリサーチの中で得られた。

2-4. 乳児院における心理的拠点形成と「もの・空間」

乳児院における小規模グループケアの生活活動と本体の生活活動を比較しつつ、観察や聞き取りから得られたエピソードを分析し、「生活活動の理解と見通し」「生活を再生産する活動の理解」「様々な道具の理解と使用」「仲間意識の広がり」と共感の渦を導き出した。集団規模が小さい方が、生活活動がより見えやすく、1, 2歳児の主体的な活動が活発になったことが指摘された。しかし、意味を共有できる1, 2歳児の子ども集団があればこそ、乳児院本体の事例にあった「おふねごっこ」のような共感的な遊びが生み出されたのではないかと推測できる。したがって、1, 2歳児の保育には、「関係性」という視点も必要だと考えられた。

第二に、「生活活動」に関する「もの・空間」を子どもに見えやすくすることは、子どもの生活活動への意欲を引き出すことと密接に結びついているということがわかった。また、おもちゃ収納を工夫し、選択して遊ぶようにすることは、遊びの主体を形成することと関連しているということもわかった。「もの」が「空間」の中でどのように存在しているかが、1, 2歳児の遊びにも大きく関わっていることが示唆された。

2-5. 保育所保育者は保育環境における「もの・空間」についてどう捉えているか

3歳未満児の保育環境に関する質問紙法による調査を行ったところ、全国の保育所保育者1338名から回答を得た。実態として行っていると回答した項目について因子分析をすると、「保育者の視野の広さが反映された環境」「日常のケアのための十分な環境」「安心感のある快適な環境」「子どもの主体性が配慮された環境」の四つの因子が抽出された。その中でも、「保育者の視野の広さが反映された環境」と「安心感のある快適な環境」は、保育者歴が長いほど、年代が高いほど、保育者の実施度が高いことがわかった。「視野の広さ」は、単に見渡す範囲が広いということだけではなく、個々の子どもの思いへの気づきや、子どもの遊びや危険性への意識、「個別性」や「関係性」への意識なども反映されているということでもある。さらに、「日常のケアのための十分な環境」と「勤務する園の運営主体」との間で有意差(1%水準)があり、「子どもの主体性が配慮された環境」と「クラスの子ど

もの年齢」との間で有意差（0.1%水準）があった。

2-6. 乳児院保育者は保育環境における「もの・空間」をどう捉えているか

全国の乳児院131か所すべてに施設長および保育者への質問票を郵送し103施設より回答を得た。回答者は1459人であった。結果を要約すると、第一に、乳児院保育者への保育環境に関する調査では、「もの・空間」に関する項目のほうが、「ひと」環境に関する項目よりも平均値が低かった。実施度も重要度も、上位10項目の中では「ひと」項目の割合が多く、下位10項目の中では「もの・空間」項目の割合が高かった。これは、保育所保育者を対象とした調査でも同様の結果が得られており、乳児院保育者についても「ひと」環境の方を「もの・空間」よりも重視する傾向が示唆された。第二に、実施度に関する54項目について因子分析を行った結果、「主体的な遊びと生活」「応答的で温かいコミュニケーション」「十分なケアと動と静のある空間」「室内外の安全性と設備の充実」「発達段階にあったおもちゃの充実」の五つの因子が抽出された。

（3）1, 2歳児保育における「もの」「空間」に必要な質（第6章）

全体を考察すると、3歳未満児保育の保育担当者は「ひと」環境を重視し、「もの・空間」については重要度を意識しつつも実態としてその発達の意義について十分理解しているとは言いがたいことが明らかとなった。また、2-1から2-6までの実証的研究を通して、3歳未満児保育における「もの・空間」に必要な質としての「主体性」「関係性」「個別性」「機能性」「安定感」「安心感」「充実感」の七つを質が浮かび上がった。1, 2歳児の保育環境における「もの・空間」は、子どもの「主体性」を機軸にして、以下の6つの質を意識して構成されるべきであると考ええる。また、これらの質を含みながら、以下のような発達の意義を持っていると考えることができる。

1. 1, 2歳児の発達に応じた「主体性」を支え、育てる役割
2. 「個別性」を重視し、その子の「心理的拠点」として「安心感」を保障する役割
3. 他者との「関係性」を支え育てる役割
4. 「機能性」と「安定感」をもった環境構成で「見通し能力」を支える役割
5. 「充実感」のある活動を引き出す役割

（4）本研究の意義と課題

本研究の意義は、第一に、日本の3歳未満児保育の歴史を押さえながら、3歳未満児、特に1, 2歳児にとっての「もの・空間」の発達の意義を質的調査・量的調査両面から検討したということである。第二に、1, 2歳児を生活主体として位置づけ、主体性を育てる保育が日本の3歳未満児保育の実践の中で行われている事実を観察研究の中で確かめたことである。また、第三に、観察研究で得られた知見を、保育所・乳児院双方の現場の保育者と実践の中で検証しつつ、3歳未満児保育における「もの」「空間」に必要な質とは何かについて検討したことである。

今後は、保育者への面接調査のデータの分析などを通して、1, 2歳児にとってのケアと教育の一体的な提供をどのように行うべきかという議論に貢献しうる研究の蓄積をおこなっていきたい。

引用文献

- ドベス, M. (1977). 「現代教育科学」を読むにあたっての道しるべ. Debesse, M・Miarale, G. (著) 波多野完治・手塚武彦・滝沢武久 (監修) (1977). 現代教育科学1 教育科学序説. p24
- 倉橋惣三 (1936/2008a). 津守真・森上史郎 (編). 幼稚園真諦. フレーベル館. p32